

戦後における奈良県林材業の展開構造 — 製材品の需要構造の変化を中心にして

荻 大陸

Studies on the development of the forestry and forest
industry in Nara prefecture in postwar
-Mainly focusing on the changes in the demand trend of lumber

Tamutsu OGI

要 旨

(1) 奈良県林材業は木材需要が拡大する1970年代半ばまでは全国でも抜きん出た発展をする一方、需要が低迷する80年代以降は逆に全国水準を大きく下回る後退を示す。

(2) この奈良県林材業の発展と後退を条件づけたのは国産材の役物に対する需要の動向であった。すなわち奈良県林材業は役物需要の増大に最もよく適合することで飛躍的發展を遂げ、その需要の縮小にともなって後退を余儀なくされた。

(3) 奈良県林材業の発展を支えてきた需要条件が大きく変化し、役物の市場が縮小しそれによって競争が激化しつつあるなかで、奈良県林材業は競争激化への対応が進まないままいっそう役物に傾斜する傾向を強めている。

は じ め に

吉野・桜井に代表される奈良県林材業は外材の輸入が本格化する1960年代から70年代半ばにかけて、飛躍的な発展をした。その勢いはあるいは優良材生産ブームをまきおこし、あるいは世上に「吉野ダラー」の名を轟かせるほどであったことはよく知られている。しかし、その奈良県林材業も70年代後半乃至80年代以降は一転して低迷を余儀なくされ、かつての勢いを失うに至るのである。本稿では戦後のとくに①60年代以降の奈良県林材業の発展がいかんにもたらされ、②その後それがなぜ後退したか、について製材品の需要構造の分析を中心に考察する。

1. 奈良県林材業の発展と後退

図-1は戦後の木材需給関係の推移を表しているが、1974(昭和49)年を劃期として、戦後の木材需給関係は大きく変化する。戦後一貫して続いてきたそれまでの需要拡大時代は終止符を打ち、基調がはっきり転換する。それでも70年代までは需要拡大期の余熱の如きなお高い水準を維持していたが、80年代に入り木材需要はさらに一段低い水準に落込み、いわゆる木材不況が顕在化する。

表-1によれば、1960(昭和35)年から1974(昭和49)年までは、わが国の製材工場数は概ね2万4,000～2万5,000で推移し、あまり大きな変化はみられない。しかし、需要拡大期が終息し

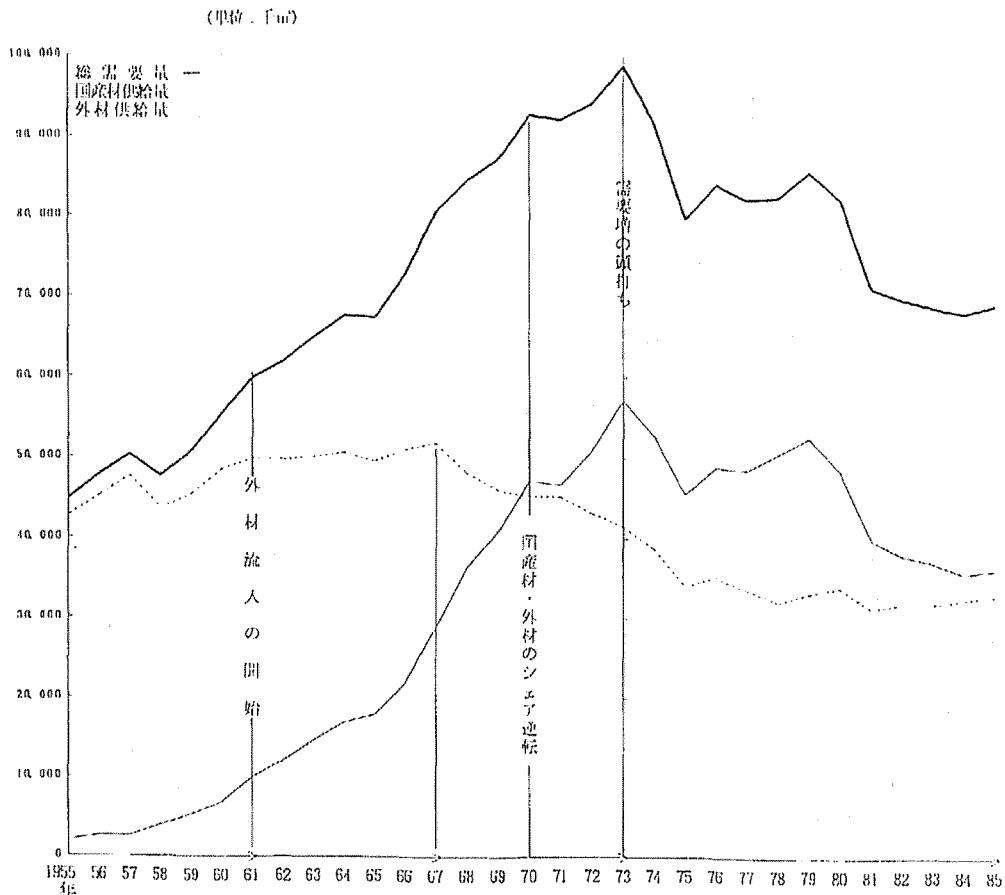


図-1 木材需給量の推移

資料：79年までは林野庁監修『林業統計要覧・時系列版』（林野弘済会、昭和57年、80年以降は『林業統計要覧』各年版より作成

注：①国産材供給量は丸太のみ（林地残材、薪炭材はふくまない）、
②外材供給量は輸入丸太+輸入製材品、総需要量は①+②である

た翌1975（昭和50）年から製材工場数は減る傾向をみせはじめ、いわゆる木材不況が顕在化した80年代に入るや、その数は顕著に減少していく。

規模別にみれば、この変化はさらにはっきりする。70年代までは37.5kw以上層が増加し、それ未満層は減少するという製材工場の規模拡大傾向がみられたのであるが、80年代にはいと最大規模である150.0kw以上層をも含め、工場数減少は全階層に及ぶ。このように総体としての製材加工産業をとりまく環境は、70年代までと80年代以降とでまったく一変する。（なお例えば1988（昭和が63）年以降より、150.0kw以上の大規模層のみは微増に転じているが、この傾向についての考察は別の機会にゆずる。）

つぎに奈良県の動向をみてみよう。表-2によれば奈良県の製材工場数は1970年代半ばまではほぼ漸増傾向にあったが、その傾向に陰りを生じた70年代後半を経て、80年代に入ると明確に減少しだしている。ただ、奈良県の場合特徴的なのは37.5～75.0kw層のみが増加し、また75.0～150.0kw

層はほぼ横ばいで推移していることである。

ここからわかるように奈良県の動向と全国のそれとはやや趣を異にしている。需要拡大期をととして全国的には製材工場数に大きな変化はみられなかったのに対し、奈良県の場合、増加傾向にあった製材工場数が一転して減少しだすのであり、変化のプロセスが全国のそれより鋭角的に表れている。また表－3で製材用素材の入荷量の推移をみると、奈良県の入荷量は国産材の場合は80年代初期から、外材も80年代半ば以降、全国に比べ低い水準を示すようになった。

このことをさらに示すのが、表－4に示した1製材工場当りの丸太消費量の奈良県と全国との比較である。奈良県の1工場当りの丸太消費量は需要拡大期をととして伸び続け、少なくとも1970（昭和45）年頃までは全国的水準より高かった。ところが需要拡大期が終息するや丸太の消費量は減少しだし、それとともに全国の水準をさえはつきりと下回るようになった。言い換えると奈良県は全国的水準より落ち込みが大きいといえよう。

しかも需要拡大期終焉以降の長い低迷期をぬけだし、全国的には80年代後半から1工場当り

の丸太消費量は再び増勢に転じ、いまやほぼ過去のピーク時にまで生産規模を回復させつつあるのに対し、奈良県の製材工場の生産規模はいまだ回復期基調にあるとはいいい難い。

奈良県の製材加工産業の後退は丸太購買力の衰えとなって同県の本木市に大きな影を落としている。80年代以降、奈良県で新たに開設をみた本木市は1市場しかないのに対し、逆に閉鎖した本木市の数は6市場に及んでいる（1993年3月現在）。

いうまでもなくそれは丸太の取扱量全体にも大きく影響している。表－5から明かなように奈良県の本木市の丸太取扱量は、80年以降ほぼ一貫して漸減している。このなかで87年から90年に

表－1 全国の製材工場数の推移

年次	計	7.5～ 22.5kw	22.5～ 37.5kw	37.5～ 75.0kw	75.0～ 150.0kw	150.0kw 以上
1960年	24,229	14,807	5,594	3,046	782	
61	24,853	14,270	6,003	3,562	1,018	
62	24,922	13,598	6,261	3,906	1,157	
63	25,295	13,119	6,487	4,290	1,399	
64	25,017	12,222	6,517	4,638	1,640	
65	24,803	11,495	6,646	4,874	1,788	
66	24,715	10,813	6,785	5,152	1,529	436
67	24,863	10,233	6,859	5,530	1,699	542
68	25,130	9,690	6,980	5,826	1,978	656
69	24,922	8,995	6,913	6,062	2,164	788
70	24,546	8,125	6,704	6,349	2,387	981
71	24,199	7,888	6,476	6,299	2,437	1,099
72	23,930	7,485	6,191	6,469	2,506	1,279
73	24,018	6,868	6,023	6,814	2,790	1,523
74	24,016	6,590	5,844	6,917	3,028	1,637
75	23,630	6,201	5,579	7,035	3,099	1,716
76	23,482	5,878	5,463	7,159	3,195	1,787
77	23,136	5,442	5,396	7,172	3,255	1,871
78	22,794	5,077	5,302	7,215	3,255	1,945
79	22,541	4,683	5,166	7,237	3,409	2,046
80	22,241	4,359	5,055	7,273	3,444	2,110
81	21,535	4,040	4,891	7,140	3,405	2,059
82	20,937	3,739	4,802	7,011	3,409	1,976
83	20,256	3,377	4,712	6,943	3,316	1,908
84	19,512	3,132	4,554	6,782	3,207	1,837
85	18,834	2,900	4,403	6,645	3,086	1,800
86	18,260	2,737	4,227	6,508	2,996	1,792
87	17,886	2,601	4,118	6,428	2,958	1,781
88	17,603	2,427	4,061	6,370	2,945	1,800
89	17,275	2,257	3,960	6,324	2,896	1,843
90	16,811	2,106	3,791	6,203	2,853	1,858
91	16,290	1,935	3,623	6,050	2,823	1,859

資料：農林水産省統計情報部『木材需給報告書』各年版

表-2 奈良県の製材工場数の推移

年次	計	7.5～ 22.5kw	22.5～ 37.5kw	37.5～ 75.0kw	75.0～ 150.0kw	150.0～ 300.0kw	300.0kw 以上
1960年	410	226	118	58		8	
61	469	250	144	61		14	
62	480	238	157	66		19	
63	473	211	164	77		21	
64	467	207	149			22	
65	457	182	148	108		19	
66	467	182	154	102	25		4
67	469	167	158	112	28		4
68	526	214	161	116	29		6
69	510	173	158	139	32		8
70	523	144	172	150	46		11
71	549	154	174	151	50		20
72	553	159	181	148	43		22
73	555	111	210	164	45		25
74	557	118	197	161	47		34
75	548	167	152	157	43		29
76	549	166	154	153	48		28
77	549	172	148	152	47		30
78	547	164	155	153	46		29
79	543	133	169	156	55		30
80	539	128	162	165	53		31
81	533	124	160	163	51		35
82	506	99	160	161	56		30
83	502	91	166	161	57	21	6
84	500	71	180	169	55	19	6
85	484	71	171	164	54	18	6
86	479	85	150	169	54	16	5
87	480	87	149	170	53	16	5
88	485	85	147	179	54	15	5
89	476	79	146	177	54	15	5
90	477	77	150	179	51	15	5
91	465	76	146	172	50	16	5

資料：農林水産省統計情報部『木材需給報告書』各年版

かけては4年間で673万戸の住宅が建つという史上空前の住宅ブームに湧いたのであるが（史上2番目は70～73年の666万戸である）、この間の奈良県の対応は単価の高い丸太にシフトし、金額ベースでは80年乃至それをやや上回る程度の水準を示したものの、その恩恵は88～90年の3年間でしかなく、しかも材積はほぼ一貫して減少し続けていることから、その対応には自ずと限界があり、その後の推移からもそのことが窺える。

表－3 全国と奈良県における製材用素材の国産材・外材別入荷量の推移

	全 国				奈 良 県			
	合計	国産材	外 材	外材率	合計	国産材	外 材	外材率
1980	52,074	20,953	31,121	60%	1,098	540	558	51%
指数	100	100	100		100	100	100	
81	45,954	19,527	26,418	57	1,016	522	494	49
指数	88	93	85		93	97	89	
82	44,070	19,953	24,117	55	948	488	460	49
指数	85	95	77		86	90	82	
83	4,526	19,392	23,134	54	898	460	438	49
指数	82	93	74		82	85	78	
84	41,218	18,946	22,272	54	877	461	416	47
指数	79	90	72		80	85	75	
85	40,792	18,814	21,978	54	816	439	377	46
指数	78	90	71		74	81	68	
86	41,238	18,379	22,841	55	814	419	395	49
指数	79	88	73		74	78	71	
87	43,354	18,771	24,580	57	852	443	409	48
指数	83	90	79		78	82	73	
88	43,891	18,811	25,080	57	864	460	404	47
指数	84	90	81		79	85	72	
89	44,490	18,553	25,937	58	863	456	407	47
指数	85	89	83		79	84	73	

資料：農林水産省統計情報部『木材需給報告書』各年版

注：材積の単位は千m³

2. 1960～1970年代における奈良県林材業の発展の要因

2－1. 国産材嗜好

図－1で示したように、70年代までの製材加工産業をとりまく環境は、木材の需要拡大期を反映して売り手市場の基調が続いた。とりわけ国産材だけで需要に対応していた1960（昭和35）年頃までは極端に需給ギャップが大きく、そのため他の一般諸物価が戦後最も安定していたこの時期に、木材だけは「独歩高」といわれる高騰を示し、それはついに60年代における本格的な外材輸入につながるわけである。

これによって原料丸太の確保難が深刻であった製材加工産業の丸太入手環境は大幅に改善され、第2次大戦後以来の木材の需給ギャップはかなり緩和された。それと同時に製材品の需要構造にも大きな変化が現れる。

表－6に示したように、戦後大幅な趨勢的上昇を続けてきた製材品の価格は、1962（昭和37）年から横這いをみせはじめ、以後1965（昭和40）年まで落ち着いた状態が続く。そうしてこうした横這い状態の後、1966（昭和41）年から再び材価は上昇に転じている。表－7は1965（昭和40）年から1969（昭和44）年におけるスギ正角の小節、1等、2等の品等間価格差の推移を表しているが、役物である小節の価格上昇率が最も高い。ここから、60年代後半からの製材品価格の上昇を最もリードしたのが役物であったことが知れるだろう。言い換えれば、この頃から役物需要

表-4 1工場当たりの
丸太消費量
単位：千m³

年次	奈良県	全国
1960年	1.7	1.3
61	1.8	1.4
62	1.9	1.4
63	2.0	1.7
64	2.0	1.8
65	2.0	1.8
66	2.1	1.9
67	2.3	2.1
68	2.2	2.2
69	2.4	2.2
70	2.4	2.3
71	2.5	2.3
72	2.5	2.5
73	2.6	2.6
74	2.3	2.3
75	2.1	2.2
76	2.0	2.3
77	2.0	2.3
78	2.0	2.4
79	2.2	2.4
80	2.0	2.3
81	1.9	2.1
82	1.9	2.1
83	1.8	2.1
84	1.7	2.1
85	1.7	2.1
86	1.7	2.2
87	1.8	2.4
88	1.8	2.5
89	1.8	2.5
90	1.8	2.5
91	1.8	2.5

資料：農林水産省統計情報部
『木材需給報告書』各年版
注：1960年から1962年までは
7.5kw未満層を含む数値
である。

が顕著化してきたということが出来る。そしてそれは以下に述べるように、とくに国産材の役物に対する需要として現れた。

ここで「役物」とは見え掛かり（目に見える部位に使用される）部材であり、品等的には一応小節以上の製材品を指す。それに対し見え隠れ（目に見えない部位に使用される）部材で、品等的には小節より下級の製材品を「並物」と呼ぶ。

さて、総体として外材は、専ら並物の代替品としてわが国木材市場に進出してきた¹⁾。それに対し、役物市場への進入はあまり強いものではなかった。言い換えると並物は外材、役物は国産材、と棲み分ける傾向が強かった。

その大きな要因として、外材の市場参入は、それによって外材と国産材との間に格付け関係を生ぜしめ、外材に対し国産材をより上位に格付ける作用をもたらしたことがあげられる。

1967（昭和42）年に行われた調査、『住宅用建築木材消費動向調査結果概要』²⁾によれば、「建築主が個人である持ち家用の木造住宅」の建築施工業者（大工・工務店等）に対し「構造材に国産材だけを使った住宅」についてその理由を質しているが、「建築主が外材を使うなといった」という回答が最も多く、業者の57%を占めている。また、「建築主が構造材に外材を使うなといった」理由としては、「外材が悪いという先入観を持っていた」が74%と最も多く、「高級材で建てたかった」が22%となっている。このようにこの頃は建築主からみた外材に対するイメージは悪く、一方国産材は外材より良いという、いわば「国産材信仰」があった。

このことは外材が使用されたケースからもはっきり窺うことができる。「建築主が個人である持ち家用の木造住宅」の建築施工業者が「構造材に外材を使った理由」を挙げてみると、「まかせられたので選んだ」が51%、「建築主が希望した」が24%、「国産材が入手困難であった」が22%、と建築主が積極的に選択して外材が使用されているケースは少ない。いわば木材に対する無関心派を中心に外材は浸透している。

この中で一見すると積極的に外材を使用したかの如くみえる「外材を使うことを建築主が希望した」ケースについて、その理由をみると、大部分の84%が「材質は劣るが安い」からと回答している。すなわち外材を選択した建築主も、外材は「材質が劣る」としてはつきりマイナスイメージを抱いていたことが知れる。

このように外材の市場参入は建築材消費のレベルにおいて、「外材は国産材より劣る材」「国産材は外材よりよい材」として、国産材のイメージを押し上げ、その使用の一般化とともに「国産材嗜好」を

つくりだすはたらきをした。すなわち、

「できれば家は国産材で建てたい、せめて見え掛かり部分だけは国産材にしたい」という「国産材嗜好」が現れる。そして住宅における木材消費性向として、見え掛かり部材（役物）は国産材、見え隠れ部材（並物）は外材、を使用するという典型的パターン（棲み分け）を

生んだのである。

2-2. 役物需要の拡大

(1) 見え掛かり部材（とくに柱）の役物化

60年代後半からの外材の本格的市場参入は、国産材の役物嗜好を生むという作用をもたらしたが、そのことと相まって役物それ自体の需要も拡大したと考えられる要因がある。それは国産材に対する役物需要が、「大壁造り」の部屋（一応それを洋室と呼んでおく）の定着によって生まれた見え隠れ部材に対する材としての、見え掛かり部材と結びついたことである。

表-5 奈良県の原木市の丸太取扱量の推移

	材 実 数	積 指数	金 実 数	額 指数	平均単価	住宅着工戸数
1980年	428,376	100	33,748,125	100	79	127
83	399,521	93	30,739,868	91	77	114
84	398,427	93	27,595,692	82	69	119
85	390,423	91	27,026,346	80	69	124
86	382,319	89	27,503,864	81	72	136
87	381,978	89	31,712,865	94	83	167
88	381,086	89	34,231,142	101	90	168
89	366,809	86	36,377,458	108	99	166
90	339,601	79	33,334,345	99	98	171
91	341,485	80	30,077,125	89	88	137

資料：丸太の取扱量は奈良県林政課、住宅着工戸数は建設省『建設統計年報』

注：1) 材積はm³、金額は千円、住宅着工戸数は万戸
2) 指数は1980年を100とする

表-6 製材品の卸売価格指数

1952～60年（1952年=100）	1960～65年（1960=100）	1965～70年（1965=100）
1952 100.0	1960 100.0	1965 100.0
53 132.1	61 122.0	66 108.7
54 146.4	62 122.4	67 124.1
55 127.6	63 126.2	68 132.9
56 132.9	64 123.7	69 136.8
57 149.0	65 120.5	70 138.9
58 146.0		
59 149.5		
60 159.0		

資料：日本銀行調べ（物価指数年報）

注：林野庁監修『林業統計要覧・時系列版』（林野弘済会、昭和47年）pp87

従来、住宅における大壁化の流れは、例えば『昭和46年度林業白書』の「真壁方式から大壁方式への移行が急速に進み、新建材等による壁面の下地材は下級材が使用されるようになり、これが外材への傾斜を強めた」³⁾という指摘に代表されるように、外材化の側面からしかとらえられてこなかった。この指摘のとおり、大壁化はそこに外材を呼び込んだことは確かである。しかし一方でその他の真壁部分（つまり見え掛かり部分）ではとくに柱に代表される部材のグレードアップ化が起こり、そこに（国産材）役物を使用することが定着したすのである。

現在の住宅をみるかぎり、見え掛かり部材＝役物、見え隠れ部材＝並物、という対応関係が明瞭に認められるが、このことはもともとからそうだったわけではない。図-2はそのことをわかりやすく模式化したものである。住宅が総「真壁造り」にあつては、例えば柱は基本的にすべて見え

表－7 スギ正角の品等間価格差の推移

年次	小節	1等	2等
1965年	166.7	134.2	100.0
66	168.0	143.1	100.0
67	169.1	136.9	100.0
68	206.8	157.0	100.0
69	213.9	162.5	100.0

資料：『昭和44年度林業白書』pp51

原資料は経済調査会「積算資料」

- 注：1) 東京における1㎡当たり
(長さ3m、10cm角)の大口
需要者価格による
2) 問屋店頭または置場渡し、
現金取引の価格による。
3) 1969(昭和44)年は1～6月
平均である。

掛かりであり、そこでは「見え掛かり」か「見え隠れ」かという、後にみるような違いはなかった。それゆえ柱はせいぜい主室（いわゆる床の間付の座敷等）となる部分にわずかにいいものが使われるという程度で、そこに役物が多量に使用されるということはなかった。

洋室すなわち「大壁造り」の部屋の登場は、それによってとくに柱の場合、同じ柱でも従来同様の見え掛かりの柱が存在する一方で、表に現れない見え隠れの柱を生むことになった。先に指摘した外材の市場参入とともに生じた国産材嗜好は、これを背景に「せめて見え掛かり部材だけは国産材・役物を使用したい」という国産材に対する役物需要となって現れ、表に現れる目に見える部材と表に現れない見えない部材をはっきり差別する傾向をつくりだすとともに、見え掛かり部材＝役物、見え隠れ部材＝並物という対応ができていく。そしてとくに見え掛かり柱が役物化したことは、役物柱の需要を大きく拡大させることになった。

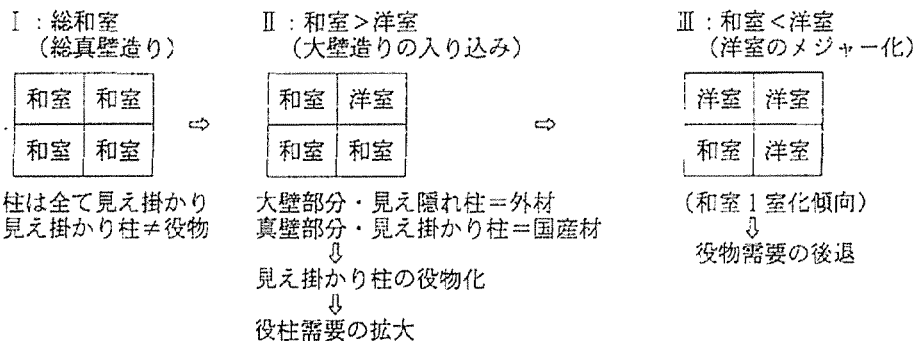
(2) フリッチ需要の発生

60年代半ばからのもう一つ大きな特徴は、まったく新しい役物としてフリッチ（集成材用化粧単板）の需要が現れることである。周知のようにわが国の集成材は一般の製材品、それもとくに役物の代替品として登場してきた。表－8からも窺われるが造作用にしても構造成用にしてもいずれも化粧ばり（フリッチ）の集成材が主流を占め、その需要は1965（昭和40）年頃から本格化し70年代を通じて急増を続ける。

これに対応して新しい製材品の役物として、とくにヒノキとスギのフリッチに対する需要が急増した。

2－3. 役物特化産地化

このような需要動向に最もよく適合したのが奈良県林材業であった。表－9は奈良県吉野町の



図－2 和室から洋室化への模式図

表-8 集成材の種類別生産量及び生産額の推移

	造作用集成材			構作用集成材			構造用 大断面 集成材	合計 生産額	
	無化粧	化粧ばり	小計	無化粧	化粧ばり	小計			
1965年			17,000			3,000	—	20,000	1,800
66			22,800			4,100	—	26,900	2,200
67			29,320			3,100	—	32,420	3,200
68			46,000			4,000	—	50,000	4,600
69			65,000			5,000	—	70,000	6,500
70			113,400			8,500	—	121,900	11,000
71			119,983			17,500	—	137,483	17,870
72			129,330			21,054	—	150,383	22,557
73			165,408			36,309	—	201,717	37,266
74			169,820			42,455	—	212,275	40,311
75			156,842			61,418	—	218,260	45,910
76			166,796			72,853	—	239,649	52,690
77			171,025			76,838	—	247,863	55,490
78			175,001			86,195	—	261,196	59,520
79			176,316			117,465	—	293,781	67,560
80	57,516	111,648	169,164	9,186	105,635	114,821	—	283,985	65,021
81	35,652	124,223	159,875	17,231	73,937	91,168	—	251,043	58,004
82	61,632	102,719	164,351	26,145	65,915	92,060	—	256,411	65,757
83	71,584	100,080	171,664	29,838	70,619	100,457	284	272,405	68,042
84	81,057	111,334	192,391	27,719	69,848	94,567	569	290,527	74,891
85	83,472	114,175	197,647	27,470	70,653	98,123	1,222	296,992	74,292
86	88,881	118,936	207,817	29,511	75,386	104,897	3,019	315,733	74,612
87	94,727	139,305	234,032	16,291	92,028	108,319	6,534	348,885	85,274
88	112,046	170,230	282,276	16,960	98,010	114,970	11,592	408,838	102,311
89	121,411	179,769	301,180	11,287	100,710	111,997	22,644	435,821	119,463
90	128,452	194,510	322,962	9,165	89,260	98,425	28,169	449,556	126,869
91	127,782	200,724	328,506	8,986	84,026	93,012	33,477	454,995	128,268

資料：日本集成材工業協同組合

製品市吉野材センターにおいて扱われた製材品のスギ・ヒノキ別平均単価の推移を示したものである。いまこれを70年代に入り西南日本最大の国産材産地として成長してきた岡山県美作産地（津山・真庭）の製材品単価と比べてみよう。表-10は美作産地の2大製品市の一つ、真庭郡勝山町にある勝市（勝山木材市場）における、1975（昭和50）年の樹材種別・等級別の製材品単価を示している。

まず表-9から吉野材センターにおける1975（昭和50）年のスギの平均単価は21万円、ヒノキの平均単価は33万円である。表-10により勝市におけるスギ製品の単価をみると3m-10.5cm角の無節が10-15万円、4m-4.5（6.0）cm×10.5（12.0）cm鴨居の無節が8-12万円、と代表的役物の単価が吉野材センターのスギ平均単価の高さにとおく及ばない。それに辛うじて匹敵するのは勝市では量的にきわめて限られた商品と思われる13.9-27.8（1本1,000-2,000円）万円の4m-4.0cm×4.5cm天井竿廻り椽の赤無節があるのみである。

表－9 吉野材センターの
スギ・ヒノキ製材品
の平均単価の推移
単位：万円／ m^3

	スギ	ヒノキ
1975年	21.0	33.0
76	20.0	34.0
77	20.5	35.0
78	21.0	36.0
79	22.0	37.0
80	21.0	36.0
81	21.0	35.5
82	20.7	35.5
83	20.0	35.0
84	21.0	35.5
85	22.0	35.5
86	22.0	35.5
87	22.3	36.0
88	23.0	36.0
89	23.5	38.0
90	25.0	41.0
91	24.8	40.0
92	24.5	40.0

資料：吉野材センター

また勝市のヒノキ製品で吉野材センターのそれに匹敵しうるのは、3 m－10.5cm角の無節の30－40万円、6 m－12.0cm角の無節の25－35万円、4 m－4.5 (6.0) cm×10.5 (12.0) cm敷居の無節の25－35万円であり、4 m－1.7cm×12.0cmヒノキ椽甲板の無節が全品目中唯一吉野材センターの平均単価を上回る36.8－42.9万円となっている。

吉野材センターにおけるスギ製品は勝市にはわずかにしか無いような超高級役物に相当する物ばかりであり、またヒノキ製品は少なくとも勝市における無節以上の役物に相当する物ばかりである。

次に全国一のスギの生産量を誇る秋田産地と比較してみよう。秋田産地における人工林スギの主力製材商品は椽と割角（あるいは割柱ともいう）であるが、量的には椽のほうが圧倒的に多く、もちろん椽は典型的な並物である。

表－11は秋田産地の椽と割角の等級別単価の推移を示している。吉野材センターのスギの平均単価は1977（昭和52）年で秋田のスギの割角の3面無節以上、1978（昭和53）年で秋田のその2面無節以上、そしてそれ以降はほぼ2面無節乃至2面無節並みの高さを示している。ここでも、吉野材センターのスギ製品は秋田産地のスギ割角の2面無節に相当する役物ばかりということになる。

吉野材センターの製品がいかに突出して役物に傾斜しているかが明らかであろう。程度の差はあれ、これは奈良県の他の主要な製品市でも同傾向である。しかも表－9に挙げた吉野材センターのスギ・ヒノキ製品にはフリッチ（単板）の扱い量は含まれておらず、フリッチは製材品よりさらに高単価である。だから同センターの製品の役物への特化傾向は実際にはもっと強い。

また、吉野材センターをはじめ奈良県内のいくつかの製品市では、全国でも他に例をみない単板市が行われているが、単板市はそれ自体がまさに役物市であり、これは奈良県の役物特化産地化を象徴しているといえよう。

例えば、美作や秋田その他の役物を供給する産地はいずれも、あくまで役物も生産しているということであって、決して役物産地と呼ぶことはできない。その意味で、京都府北山のような非製材産地は別として、奈良県のみが唯一役物に特化した産地を形成した。

いわゆる吉野材銘柄は、高度な育林技術で成り立つ吉野林業のもたらす良質な林木資源を基盤に、発達した原木市が広域的に「役物向き丸太」（これがいうところの「良質材」あるいは「優良材」であろう）を集荷・集積し、吉野・桜井を核とする製材部門が役物専門加工を担当し、他地域の追随をゆるさぬ役物特化産地を築き上げることによって成立したといえる。これが奈良県林材業が大発展を遂げた最大の要因であろう。

3. 1980年代以降における奈良県林材業の後退の要因

3－1. 役物需要の後退

表－12は80年以降の吉野材センターの製材品・単板別の取扱い材積・金額を示したものである。すでに丸太の取扱いに関するところでもふれたが、例外的に住宅ブーム時に80年水準を上回ったとはいえ、ブームが史上空前でありそれが4年間続いたことを考えれば、十分にその恩恵に浴し

表-10 勝山木材市場の樹材種別・等級別製品単価

杉 正 角 長さ 3 m				松 正 角 長さ 3 m				のじ、ラス地、貫				天井竿廻り椽 (杉)			
寸法	等級	安値-高値		寸法	等級	安値-高値	長さ	寸法	等級	安値-高値	長さ	寸法	等級	安値-高値	
6.0	1	20,000 - 23,000		6.0	1	20,000 - 25,000	2m	0.9×0.9		30,000 - 31,000	3m	3.0×3.0	上小	本	110 - 120
〃	特1	27,000 - 28,000		〃	特1	28,000 - 30,000	〃	1.2×0.9		25,000 - 27,000	〃	〃	無節	〃	150 - 300
7.5	特1	25,000 - 26,000		7.5	特1	28,000 - 30,000	3m	1.2×0.9		25,000 - 28,000	4m	〃	上小	〃	220 - 230
9.0	1	23,000 - 24,000		9.0	1	23,000 - 25,000	〃	1.5×10.5		25,000 - 28,000	〃	〃	無節	〃	300 - 500
〃	特1	27,000 - 28,000		〃	特1	28,000 - 30,000	4m	〃	特1	33,000 - 35,000	〃	〃	赤	〃	500 - 1,000
10.5	1	20,000 - 23,000		10.5	1	25,000 - 30,000		垂	木、胴 椽		3m	4.0×4.5	無節	〃	300 - 500
〃	特1	30,000 - 40,000		〃	特1	80,000 - 90,000	杉 3m	4.0×4.0	丸身なし	35,000 - 40,000	4m	〃	上小	〃	350 - 370
〃	丸身なし	50,000 - 55,000		〃	丸身なし	100,000 - 155,000	4m	〃	1	30,000 - 33,000	〃	〃	無節	〃	500 - 800
〃	上小	70,000 - 100,000		〃	上小	180,000 - 250,000	〃	〃	丸身なし	45,000 - 47,000	〃	〃	赤	〃	1,000 - 2,000
〃	無節	100,000 - 150,000		〃	無節	300,000 - 400,000	〃	4.5×4.5	丸身なし	42,000 - 45,000			敷 居、鴨 居		
12.0	丸身なし	43,000 - 50,000		12.0	丸身なし	85,000 - 90,000	松 3m	1.7×4.0	丸身なし	40,000 - 42,000	杉 2m	4.5×10.5	上小	40,000 - 50,000	
〃	上小	60,000 - 80,000		〃	上小	130,000 - 160,000	4m	〃	1上	30,000 - 35,000	〃	〃	無節	80,000 - 100,000	
〃	無節	100,000 - 130,000		〃	無節	200,000 - 300,000	〃	〃	丸身なし	50,000 - 55,000	4m	4.5×10.5 (6.0×12.0)	上小	50,000 - 60,000	
同	長さ 4 m			同	長さ 4 m			杉	板		〃	〃	無節	80,000 - 120,000	
6.0	1	22,000 - 25,000		6.0	1	23,000 - 27,000	2m	0.9×24.0	1	55,000 - 58,000	松 2m	4.5×10.5	上小	70,000 - 100,000	
〃	特1	35,000 - 40,000		〃	特1	38,000 - 42,000	〃	1.2×12.0	1	28,000 - 30,000	〃	〃	無節	150,000 - 200,000	
7.5	特1	28,000 - 30,000		7.5	特1	35,000 - 40,000	〃	1.2×18.0	1	42,000 - 45,000	4m	4.5×10.5 (6.0×12.0)	上小	120,000 - 150,000	
9.0	1	26,000 - 28,000		9.0	1	27,000 - 30,000	〃	1.5×18.0	1	42,000 - 45,000	〃	〃	無節	250,000 - 350,000	
〃	1上	30,000 - 33,000		〃	1上	35,000 - 40,000					2m	4.5×15.0	無節	100,000 - 150,000	
10.5	1	28,000 - 30,000		10.5	1	40,000 - 45,000									
〃	丸身なし	28,000 - 45,000		〃	丸身なし	85,000 - 90,000		松	椽 甲 板		3m	10.5	特1	25,000 - 27,000	
12.0	丸身なし	40,000 - 42,000		12.0	丸身なし	80,000 - 82,000	4m	1.7×10.5	特1	60,000 - 63,000	3m	10.5×15.0	特1	30,000 - 35,000	
同	長さ 6 m			同	長さ 6 m		〃	1.7×12.0	特1	55,000 - 57,000	4m	〃	特1	40,000 - 45,000	
10.5	丸身なし	65,000 - 70,000		10.5	丸身なし	140,000 - 145,000	〃	〃	上小 枚	1,000 - 1,200	〃	12.0×30.0	特1	45,000 - 50,000	
12.0	丸身なし	70,000 - 75,000		〃	上小	150,000 - 180,000	〃	〃	無節	〃 3,000 - 3,500	6m	〃	特1	60,000 - 70,000	
〃	上小	75,000 - 85,000		12.0	丸身なし	150,000 - 155,000			栗 土 台 角		4m	4.5×4.5	丸身なし	35,000 - 40,000	
	松 土 台 角			〃	上小	170,000 - 200,000	3m	10.5×10.5	特1	70,000 - 80,000			足 場 丸 太		
3 m	特1	35,000 - 40,000		〃	無節	250,000 - 350,000	〃	12.0×12.0	特1	80,000 - 100,000		6m上	m	130 - 150	
9.0×10.5	丸身なし	80,000 - 85,000		13.5	丸身なし	125,000 - 130,000	4m	〃	特1	80,000 - 100,000		8m上	m	130 - 150	
9.0×10.5	丸身なし	80,000 - 85,000		〃	上小	140,000 - 150,000									
4 m	丸身なし	80,000 - 85,000													
10.5×12.0	丸身なし	80,000 - 85,000													

資料：勝山木材市場「勝山木材市相場表」〔昭和50年1月22日第866回市〕

たとはいえず、ましてそれ以外の時期はかなりはっきり低迷を示しており、やはり総体としての後退を指摘できよう。具体的にいえば住宅ブーム時に単価の高い単板の生産量を増加させることで売上額を伸ばし、単板生産がかなりの底支えになったことは確かであるが、それにも限界があった。

このように80年代に入り奈良県林材業の勢いはかなり後退するが、それは、この時期に木材需要が一段と縮小しいわゆる木材不況が深刻化するという、総体的な環境悪化要因のためだけではないとおもわれる。

すでにみたように、洋室（大壁造り空間）の定着が役物需要と結び付き見え掛かり材の役物化を引き起こし、その結果、柱を主体とした役物の需要が一気に増大したのであった。しかし、わ

表-11 秋田杉の樫と割角（等級別）の価格の推移

単位：円／m³

		樫	割				角
			一面無節	二面無節	三面無節	四面無節	
1977年	1月	50,000	120,000	160,000	200,000	300,000	
78年	1月	47,000	115,000	180,000	245,000	275,000	
79年	1月	52,000	140,000	250,000	330,000	360,000	
80年	1月	67,000	160,000	300,000	420,000	435,000	
81年	1月	51,000	120,000	270,000	390,000	410,000	
82年	1月	49,000	110,000	260,000	380,000	400,000	
83年	1月	50,000	110,000	260,000	360,000	400,000	
84年	1月	46,000	90,000	210,000	310,000	350,000	
85年	1月	48,000	95,000	200,000	300,000	320,000	
86年	1月	46,500	95,000	220,000	290,000	300,000	
87年	1月	45,500	98,000	240,000	280,000	320,000	
88年	1月	53,500	135,000	280,000	350,000	400,000	
最高価格		69,000	180,000	350,000	460,000	500,000	
	1980年 3月		1987年 9月	1987年 9月	1980年 2月	1980年 3月	
最低価格		44,500	90,000	160,000	200,000	250,000	
	1986年 7月		1983年 6月	1977年 1月	1977年 1月	1977年 5月	

資料：割角は秋田県北木材センターの出来値、樫は東京秋田会評定による
東京店着価格。

注：1）樫の規格は3.65m×1.3cm×9.0cm、割角の規格は3m×10.5cm角

2）秋田杉とは人工林スギのことである。

3）秋田産地の割角は1977（昭和52）年1月に開発された。

表-12 吉野材センターの製材品・単板別取扱材積・金額の推移

	製材品				単板				合計			
	金額	指数	材積	指数	金額	指数	材積	指数	金額	指数	材積	指数
1980	4,191,933	100	15,843	100	378,245	100	7,135	100	4,570,178	100	22,978	100
81	3,976,226	95	15,144	96	326,100	86	6,246	88	4,302,326	94	21,408	93
82	3,768,509	90	14,485	91	370,260	98	7,168	100	4,138,769	91	21,653	94
83	3,270,527	78	12,988	82	345,573	91	6,973	98	3,616,100	79	19,961	87
84	2,969,734	71	11,368	72	337,779	89	6,818	96	3,307,513	72	18,186	79
85	3,068,572	73	11,401	72	275,470	73	5,573	78	3,344,042	73	16,974	74
86	2,984,341	71	11,088	70	345,377	91	7,204	101	3,329,718	73	18,292	80
87	3,716,240	88	13,619	86	487,096	129	6,991	98	4,203,336	92	20,610	90
88	4,003,487	95	14,388	91	656,467	172	10,487	147	4,659,954	102	24,875	108
89	4,220,354	100	14,668	93	626,715	166	8,712	122	4,847,069	106	23,380	102
90	3,991,080	93	12,713	80	693,073	183	8,798	123	4,604,153	101	21,511	94
91	3,612,810	86	11,910	75	620,958	164	8,424	118	4,233,768	93	20,334	88
92	3,674,833	87	12,209	77	571,426	151	7,398	104	4,246,259	93	19,607	85

資料：吉野材センター

注：金額の単位は千円、材積の単位はm³

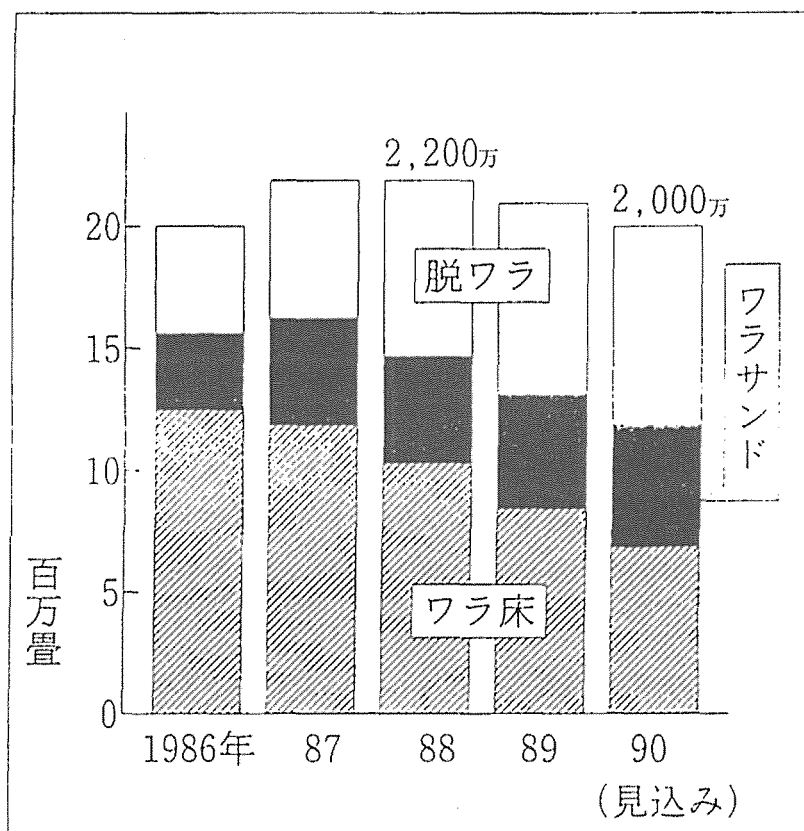


図-3 畳需要の推移(業界推定)
注：1990(平成2)年12月23日「日本経済新聞」

が国の住宅への洋室の参入はそもそも和室(真壁造り空間)の後退と表裏をなすものであり、洋室化の流れは一旦は拡大した役物の使用部位を狭めていくことを意味する。

80年代を通じて洋室化は著しく進み、いまや新設住宅に占める和室の数はせいぜい2室どまりが主流となり、洋室が和室を押し退けてはつきりとメジャー化してきた。それと同時にいわゆる2間続きの和室が減少しつつあり、高い等級の役物を使う部位も減少している。すなわち「需要量減少」と「下級役化」というダブルパンチで役物の後退が起きている⁴⁾。

図-3は1987(昭和62)年からはじまる住宅ブーム時における畳(畳床)の需要の推移を示したものである。住宅着工戸数が長期の低迷を脱し、1987(昭和62)年には一気に167万戸となり、1988(昭和63)年168万戸、1989(平成元年)年166万戸、1990(平成2)年171万戸、と空前の住宅ブームが続くなかで、畳の需要は1988(昭和63)年以降漸減してきており、和室の後退を裏付けている。

いま図-3の畳数を基に、1つの和室の大きさを仮に6畳として計算すれば、新設住宅1戸当りの和室数は1988年の2.2室から1990年には1.9室に減少している。

3-2. 低い品質管理意識

役物に特化することで大発展を遂げたことは、奈良県林材業に「役物信仰」あるいは「丸太信仰」ともいべき観念をうえつけた。このことが、80年代以降の木材需要の縮小にともなう産地

間競争の激化と住宅供給の担い手が旧来の大工・工務店主体からいわゆる住宅メーカーへと変化したこと等によって進行しつつある製材品の品質改善への動きに、奈良県林材業が立ち遅れる大きな要因になっている。

奈良県材を扱っている滋賀県、岡山県の製品市によれば、
「吉野や桜井のメーカーは『丸太が良いから製品も良い』という意識が強く、製品の品質管理がおろそかになっている」という。

奈良県の林材業界には役物が採れる良い丸太へのこだわり（役物・丸太信仰）がきわめて強く存在し、しかも「丸太の良さ」と「製材品の品質の良さ」とを同義に理解している面が否めない。

高い品等の製材品つまり役物が採れる「良い丸太」を使うから、狂ったり割れたりせずまた寸法精度の高い品質の「良い製品」ができる、ということにはもちろんならない。だから「丸太が良いから製品も良い」というのはまったく見当違いである。品等と品質は別概念である。

奈良県では吉野林業の中核部を中心にスギの葉枯らし乾燥が行われているが、これも役物志向を色濃く反映している。その目的は専ら材の色あがりを良くするためであって、だからヒノキは葉枯らしされない。葉枯らしは高級役物生産と結合したものであり、製材品の品質管理上の意図から行われているわけではない。

これは製材メーカーの製材品乾燥に対する関心の低さにも現れており、奈良県の製材工場の人工乾燥機普及率は1991（平成3）年で、いまだ全体の1割にも達しない低さである（奈良県林政課調べ）。

それを反映して、「吉野材は乾燥製品といえるものは少なく、品質管理は良くない」と先の製品市はきびしい評価を下している。

さらに、奈良県外だけでなく県内の製品市からも指摘される難点として、
「〔奈良県のメーカーは〕クレームを嫌がる」という。滋賀県の製品市のある浜間屋は
「耳の痛いことを言うと、すぐ出荷してこなくなる、だからアドバイスしたくても、その気にならない」という。

本来、クレームはメーカーにとって、買い手からもたらされる貴重な市場情報である。これに適切に対処し、改善を重ねることで商品もメーカーも向上する。逆に問題がありながら、それがメーカーや生産現場に届かないことを恐れねばならない。しかし、奈良県製材メーカーには市場情報を自ら遮断してしまう傾向がある。

お わ り に.

近年、奈良県ではヘリコプター集材が丸太出材の主流を占めつつある。それがわが国で唯一奈良県においてのみ一般化したことは、同県がとりもなおさず役物特化産地であることを丸太のレベルで物語っている。ヘリコプター集材は役物が採れる高単価の丸太だから可能なのである。しかもヘリコプター集材は末木を出材対象としないことから、その役物特化傾向をいっそう強めている。

奈良県の林材業界は役物志向が強い反面、並物・並材（役物向き丸太）を軽視・蔑視する傾向もまた強い。そのせいでそもそも並材を挽きたがらず、原木市でも並材を積極的に集荷しようとはしたがない。例えば1970年代には桜井に10以上を数えたといわれる並材工場はいまやあるかなしきとなり、製材メーカーの並材離れが進む一方、原木市でも小径木の取扱いを忌避する傾向が生まれ「小径木の持ち込みお断り」を掲げる市場さえ現れている。

このように、奈良県林材業の発展を支えてきた需要条件はいまや大きく変化し、役物の市場が

縮小しそれにともなって競争が激化しつつあるなかで、奈良県林材業は競争激化への対応が進まないまいつそう役物への傾斜を強めている。

引用文献

- 1) 荻 大陸 (1989) 製材商品の近代化に関する研究, 都市文化社, 73~74
- 2) 林野庁 (1969) 住宅用建築木材消費動向調査結果概要, 27~33
- 3) 昭和46年度林業白書, 14
- 3) 村尾行一 (1989) 日本木材市場における外国産材優位の基礎 建築用材価値系列の分立 愛媛大学農学部演習林報告, 第27号, 32~42

Résumé

(1) Due to the rapidly increasing demand for timber, forestry and forest industry (saw industry) in Nara pref. had developed outstandingly until the mid-1970's. Since early 1980's, however, the demand for lumber has drastically decreased. Sawmill in Nara pref. were damaged by this demand change and began to decline.

(2) Sawmill in Nara pref. primarily have produced high grade lumber. The change in the demand for the high grade lumber caused the development and decline of the sawmill.

(3) The market for high grade lumber shrunk, so the competition among the sawmills producing such high grade lumber in Japan became very severe. In this situation sawmills in Nara pref. is still concentrating on the production of high grade lumber without any countermeasure for future.